

SSKR I.L.EXPRESS

全国自立生活センター協議会 (JIL)
Japan Council on independent Living Centers
〒192-0046 東京都八王子市明神町 4-11-11-1F
TEL 042-660-7747 FAX 042-660-7746
E-mail:office@j-il.jp URL http://www.j-il.jp/

jil

東北関東大震災 障害者救援本部特集号

自立情報発信基地

No.10

手探りからの2年と3ヶ月...

岩手県大船渡市 NPO 法人 センター123

(被災地障がい者センター おおふなと) 代表 千葉 秀一

◆ 立ち上げ

岩手県の沿岸南部の町「大船渡」、サンマとセメントと新沼謙治が特産品の小さな町です。自宅は流され、車で逃げて高台の娘の家にもう少しという時に津波と遭遇、車を捨てようだめだと思いつつも逃げ切ることができました。

私は震災前からCILもりおかの職員として障害者の自立支援に携わっており、その経緯から避難所の障がい者家族の身の回り支援を行っていました。その活動がセンターいわての一員であるゆめ風基金の理事の目に留まり、大船渡の障害者支援をぜひお願いしたいというお話になったのです。通常であれば会うことのない関西のゆめ風基金の理事にお会いしたこと、それが全ての始まりです。

「被災地の障がい者を救っては頂けませんか」と。しかし、私は被災者の身、ボランティアの経験も全くないため悩みました。大いに悩んだ末に決意、2011年8月に「被災地障がい者センターおおふなと」を立ち上げました。妻と二人で。



(結成当時のスタッフの皆さん)

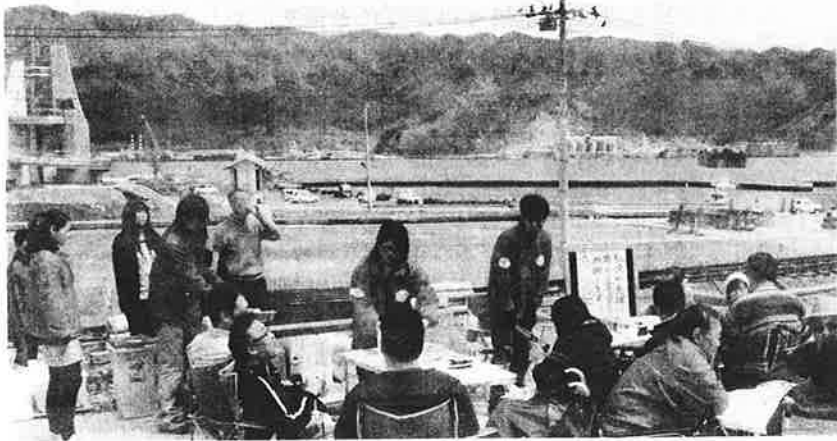
◆ 手探りからの2年と3ヶ月

あの震災後の混乱している状態の中、今何をすれば、どこから聞けばなど不安からのスタートでした。

医療班チーム会議・ボランティア定例ネットワーク会議などに参加し、ニーズの把握に努めている時、医療班チームの主任ドクターの山野目ドクターには送迎支援の強い要望を受け、たくさんの人を紹介いただき勇気もらったことを思い出します。被災当初は、物資の提供、介助(買物・見守り)、救援物資の受け取り代行、送迎と様々な支援を行いました。

翌年(2012年)からは仮設住宅にほとんど入居し、物のほうも各方面のボランティア団体の温かい配慮がいきわたり、最低限の環境が整い始めた頃から今のセンターおおふなとの送迎支援というカタチができました。新しく若い才能のある職員を入れ団体として機能し、この年の4月にNPO法人化しました。





2013年9月までの送迎実績は人数2007人 回数3462回、月平均にして人数88人 回数160回です。その他の活動として「2家族への生活介助」と「視覚障害・言語障害団体、家族会への送迎とイベントのサポート」、それから3年目になる「利用者との交流会バーベキュー」を行います。また、被災地支援として、小さな仮設住宅4～5か所で開催する秋の「みんなでサンマを焼いて食べよう」の会などは非常に好評で喜ばれています。利用者は支援に対し皆さん感謝し、ありがたがっています。

全国の募金された多くの善意と、ゆめ風基金、東北関東大震災障害者救援本部にかかわるすべての人に対して・・・私も支援された人の一人です。手さぐりからの2年3か月の支援を振り返ると、当初から掲げた「すべてのことをやろうとせず、できることをやる」が負担を軽くしそして何より、数えきれないぐらいの人に支えられて継続できたと思います。

◆ この先も手探り

今センターおおふなどは、来年の4月に就労継続支援B型事業所の開所に向け指定申請、作業所建設と大事な時期にいます。ニーズの多い送迎支援と事業所運営は両立できるのか。送迎支援の受け皿はなく、中止すれば利用者の気持ちは。自立できなければ認証を受けNPO法人格を得た意味もなくなる。など、など、たくさんの越えなければならぬ坂をひとつずつ・・・この先も手さぐり続きます、亡き妻の見える力に背中押されながら。

◆ 遠くから応援してくれる皆様へ

被災地のことを‘今もまだ’忘れていないことに感謝し、とてもありがたく、大きな励みになっています。皆様の優しさに対し、少しばかりのお返しと思ひ、私たちのできることは微力ですが、これからも支援活動していきます。



（上映会で挨拶 2013/2/3）

訃報のお知らせです。

救援本部の立ち上げに貢献された三澤 了さんが9月30日午後6時33分逝去されました。

三澤さんは、DPI議長としてご活躍されながらも、救援本部を立ち上げ会計監査としてご意見をいただきました。「逃げ遅れる人々」の完成記念上映会では以下のような挨拶をされました。

「緊急時に何かの対策をたてることも大事なんですけれども、何にもない時に障害者が普通の地域でより多くの市民と交わって生きていける、そういう状態が作られていれば、今回のように一般市民の倍以上の方が亡くなったり、逃げ遅れてしまうということがなくてすむんだと考えます。」

三澤さんの姿勢が伺えます。この挨拶はその後各地の団体の機関紙で震災の教訓として紹介されております。

DPIでは、三澤さんを偲ぶ会を企画中とのことです。

詳細がきまりましたら、お知らせいたします。 ご冥福をお祈りします。

被災地は…今

その3 震災から、二年半が過ぎて

阿部 俊介 (被災地障がい者センター石巻 代表)

私が東日本大震災で被災して、被災地障がい者センターに関わるようになり、二年半が過ぎました。この間には色々な事がありました。様々な方々との出会いと別れなど、今までには経験したことがないような事が沢山ありました。まさか、自分が地方に行き、講演するなんて、夢にも思いませんでした。

センター石巻を立ち上げてから、この二年間を思い起こすと、たくさんの活動や行動をしてきたなと思います。活動してきた中で一番成功したと思うのは、私達の情報紙「によっきり!」です。

石巻という場所は、震災前から、障がい者が街の中を自ら出歩くということがありませんでした。それは、街に行ってみたい場所はあるけれど、車椅子で行けるかどうかわからなかったからです。一般的なタウンガイドみたい物はあるけれど、車椅子利用者にとってのバリアフリー情報はありません。行きたい所がバリアフリーとはかけ離れている場合もあります。

そこで私達の出番で、「によっきり!」は、私達障がい者が自ら取材に行き、街のお店の紹介をし、バリアフリーかどうかのチェックもします。

私達は、バリアフリーの店ばかりは行きません。

わざと、車椅子では無理だと思われる場所に行き、店員やお客さんにお手伝いをお願いします。



(センター石巻の機関紙「によっきり」)



(町を探索する阿部さん)

それは、私達みたいな人達も来るんだということをお店の人や周りの方々にアピールするためです。その中で、お店の方にご理解をしていただきます。店を作り直すことはできないけど、障がいがある人も入れるように、配慮してくれたり、お手伝いをして下さると言われた時は嬉しかったです。石巻の人々は私達障がい者を見たり、接したことがない人達がほとんどです。そんな石巻で障がい者の存在を知ってもらうには、自分達が外に出てアピールすることが必要だと思います。

バリアフリーな街にするのであれば、やはり障がい者自身が出歩いて存在をアピールすることや、いろいろな人達と話し合いをしたり関わりあいをもつのが必要な事だと私は思います。

「復興するなら、以前の石巻ではなくて、誰もが暮らしやすい街にすること」が私の目標です。

その4 不安を抱えながら

宮下 三起子（あいえるの会 郡山市）

3月11日の震災から、2年8カ月が経とうとしています。まだ3年過ぎていないんだ、というのが実感です。被災に合われました皆様には、復興も中々前に進まず、生活しづらいのに申し訳ないと思いますが、何だか昔にそんな事があったなーと思えるくらい、遠い昔の出来事のような感じがありません。日々の生活に流されてしまっているのが現状です。しかし、その一方で毎日のように放射能のニュースが流れて、本当にこのままで大丈夫なのかと思う気持ちも全くないという事ではありません。

あいえるの会は、障がい者の方の地域生活を支援しています。震災当時は、今後の生活がどのようになるのか不安を抱えながら、また、今後、同じような震災が起きた時に、どのような対応をしていけば良いのかと、6ヶ月位職員で話し合いをしてきました。緊急連絡簿の作成や、防災に関するマニュアルの作成等を行っていきました。また、一時的に避難できる場の確保という事で、他県で近くの自立生活センターへの協力依頼等をしていましたが、現在は、正直「同じような災害は起こらない」と思っている人が、多いのではないのでしょうか。本来であれば、もっと今後について話し合いや行動を起こす必要があると思います。

例えば、災害が起きた場合、逃げる手段の確保・人の確保は、今回の震災の時にガソリン不足の事や、1車両に最大でも3台の車いすしか乗らないので、現在のあいえるの会の車両では足りない。また、障がいの無い人も被災にあっているという環境で、介助者不足はかなり大きなダメージを受けます。避難所に避難出来たとしても、介助者がいなければトイレ等にも行けないという事になります。この問題は、被災に遭ったから大きくなった問題なのかというと、その事も原因の一つとは思われますが、以前からの課題でもありました。交通の問題は、障がい者の方が利用しやすい交通機関になっていない事や、車社会なので車がなければ移動が困難となります。また、介助者不足は震災前からの課題でしたが、他市町村から避難してこられた高齢者・障がい者の方も支援が必要という事で、利用者は増えるが、新しい事業所が増



えていないという事もあります。そのため、どのヘルパー事業所も対応が難しいという事で、ヘルパー派遣を断られる事が多々あります。重度の障がいになればなる程、介助の必要性は大きいです。

今まで、あいえるの会の理念でもある、どんなに重度の障がいがあっても、地域で生活をしていくための活動という事で行ってきましたが、介助者がいなくなると、地域での生活が難しくなるという事になってしまいます。今後どのように介助者を集めていくのか考えていく事が、今一番重要ですが、中々介助者が集まらない状況です。

被災にあつて、本当はやらないといけないという事は、きつと山積みのようになっていると思いますが、現実には日々の事を行うのが精一杯となっています。また、今の状態では同じような災害が起きても、何一つ改善できていないのでは、と不安もあります。普段からゆとりが無いと、何か特別な事が起きても対応できません。

障がい者問題はごく一部の人の問題だと思われ、広く伝えていくには時間がかかるように、被災者の問題も、当初は大きく取り上げられていましたが、徐々に被災に遭っている人だけの、自分には関係ない事と思われるようになってきています。被災地の現状を伝えていく事は大事な事だと思ひ、今後も活動していきたいと思ひます。また、この場をお借りしまして、被災地にご支援頂きました皆様に、深く感謝いたします。ありがとうございました。

復興に向かって…さまざまな取り組み

みちのく TRY

(陸前高田市奇跡の一本松から宮古市田老スーパー堤防まで)

7月29日(月)～8月9日(金)の期間、地域のバリアフリーを訴え岩手県陸前高田市・奇跡の一本松から岩手県宮古市田老・スーパー堤防までを東北の障がいのある方が中心となって歩きました。震災で亡くなられた方々へ追悼の想いを胸に各市町の役所に要望書提出、地元の人たちと交流、アピール活動など様々な活動をしながら歩きました。

「災害から復興する街が障がい者も住みやすい街になってほしい。」「改めて被災地を歩くことで全国の方達へその状況を伝えたい。」それぞれの色々な思いを訴え、考えながら被災地を歩きました。何度か雨に降られ、最終日は秋田で新幹線が止まるほどの土砂降りの中それでもゴールしたいという思いから歩きました!

ご支援・ご協力を頂いた皆様、本当にありがとうございました。これからも応援よろしくお願いします。

◆ トライを終わって

今回のみちのく TRY2ndは東北の当事者限定でこじんまりとしたTRYでした。でも、結束力は高かったと思うし、ほぼ同じ環境であったり、また進んでいる分野は勉強になり、東北が抱えている問題の共有が出来たことはとてもよかったと思っています。なにより、悪天候、悪路を一生懸命歩いてくれた皆さん、一緒に頑張ってくれてありがとうございました。ある市では、「復興に向けてお年寄りや社会的弱者から、車椅子の方々、目の見えない方、耳の聞こえない方、みんなにとって住みやすい街にし

たいと思っている」と言ってくださった市長さんもいて、TRYが繁栄されたのではないかと、とても嬉しかったです。いろいろあったが、TRYをやってよかったと思いました。

(伊東 明美)

豪雨あり、震度5の余震あり、自然と戦いながらの2週間。色んな出来事がありました。2度目の被災地でのTRY。「あんたたち去年も歩いてたよね」「昨日は隣町で見かけたよ」「TVで見たとよ」など道すがら声を掛けていただくことも多く差し入れも沢山頂きました。各地域の事業所さんや行政も積極的に関わってください、それぞれの考え、思いをお互いに話すことが出来たと思います。

障がい者が自分に自信をつけること、地域、行政の人たちにこちらに目を向けて考えてもらうことのきっかけ作りがボランティアさんをはじめ多くの方のご支援のお陰で少し進んだ気がします。これをどう発展させていくかが課題で、TRYはまだまだ終わらないのだと感じています。

(黒柳奈緒美)

私は、はじめのみちのく TRYを知らずに2ndからの参加でイメージがつかないまま歩き始めました。運動音痴の私は高校時代も文化部だったので歩き始める自信は正直ありませんでしたが、歩き始めると前半は苦しかったもののだんだん歩く体力が付いてきたのか後半は楽しく歩かせて頂きました。沢山の出会いがあり、とても良い経験になりました。

(佐々木紫帆)



関西へ石巻から親子研修

（いつか大阪のような活動ができれば）

「大阪の研修に行きませんか？」と声をかけてもらい、「行きます」と返事はしたものの、重度自閉症の息子、翔一との旅。長時間の移動、初めての場所、初めて会う人達、暑い大阪。四泊五日も耐えられるかなあ、翔一より私の方が大丈夫かしら…、ドキドキしながら、8月4日、大阪へと出発しました。

石巻からは参加者全員でチャーターしたバスに乗り、仙台へ行き、そこから大阪まで新幹線で向かいました。乗り物が大好きな翔一ですが、これだけ長時間乗り物に乗ったことがなかったので、どんな反応をするかと思っていましたが、終始落ち着いていたので、ちょっと驚きでした。

大阪での研修中は、日中は親子別行動で、乗り物が好きな翔一が楽しめるように、日程を組んでもらいました。石巻では震災後、電車が全線開通しておらず乗る機会が少ないので、楽しめたのではないかと思います。私の予想に反し、移動中も落ち着いていて、研修中も同い年のボランティアさんと少しずつ仲良くなっていったようです。話すことができず、意思表示も上手にできない息子。本人もボランティアの方も手探りで大変だったと思います。初日に帰ってきた時は、二人とも疲れ切って帰ってきましたが、最終日はそれが嘘のように笑顔でした。二日目にはUSJにも行きました。そこで、アトラクションに乗せてもらい、翔一なりに楽しんでいた様子を聞き、嬉しくなりました。最終日は大阪の名所を回ってくれたようで、本当に大阪を満喫させてもらいました。

私の研修は、初日は「出発のなかまの会」の作業所とグループホーム、二日目は豊能障害者労働センターを見学し、両日共に保護者の方や職員の方の話を伺いました。そこで、石巻との違いを感じました。地域の中に溶け込んでいましたし、利用者の方々が意欲的に働いていました。何より、障害者本人が行政に直接意見を言いに行く、というのには驚きました。それと、その人に合った作業を探して提供する、本人のやる気を大切にする、とにかくやってみて、ダメだったら違う方法を探す、どれも簡単なようだけど、なかなか実践するのは難しいことだと思えます。



（ボランティアさんと一緒に）

外に出すことで成長してゆくという言葉も、どちらかと言えば内に困ってしまう私には耳の痛い話でした。何より、お会いした方々は前向きでとてもパワフルで、私達にも、もっともっと前に出て行っているんだよ、と励ましてくれました。ここまでなるには大変だったことでしょう。石巻は大阪のような環境ではないけど、いつか大阪のような活動ができればいいなと思っています。そのためには、まずは自分が変わらないといけなと思っています。

大阪研修中、翔一は知らない所へどんどん出ていき、私の知らない時間を過ごしてきました。その様子を見て、私が思っている以上にいろんなことができるのかもしれないと考えるようになりました。そのためにはできるだけ、いろんな機会を与えてあげなくてはいけないと思っています。

今、翔一は、毎日通所施設に通っています。相変わらずマイペースで行動しています。意思表示も上手ではありませんが、前よりも伝えようとする姿が見られるようになりました。何より、前は翔一にベツタリだった私が、離れた所から見守られるようになり、大阪での研修で「なんとかなるさ」という気持ちがもてるようになったと感じます。一人では無理だったと思いますが、たくさんの人達に助けていただき、研修を無事に終えることができました。スタッフの皆さん、ボランティアの方々、ありがとうございました。思い切って大阪に行ってよかったです。またいつか、翔一と行ってみたいと思います。

（木村 育美）

大阪府

つながる心 つなげる勇気

ポジティブ生活文化交流祭前夜祭
被災障害者報告会&交流会

11/23(土)晴天の秋晴れ、大阪の長居公園自由広場にて第4回ポジティブ生活文化交流祭が開催。今までの同交流祭は天気に恵まれなかったのですが、初めての晴れの下での開催ということで特に多くの市民が来場されました。数あるブースの中で特に多くの人が見えたのが被災地が開いたブース。関西の方の被災地への関心が見られました。前日には前夜祭(報告会)も行われ、被災地の方々は前向きな気持ちいっぱいでの発表をしていました。報告会、交流祭と楽しくもあり、自分たちも考えなくてはいけない提言ありの内容で、ポジティブ生活文化交流祭のチラシに「東北⇄関西」の文字があるように地域の方々の絆を確かめ合う2日間でした。今まで準備されたスタッフの皆様お疲れ様でした。



神 奈 川 新 聞 2013年(平成25年)11月23日 土曜日

神奈川県 支援のわ 各地から

被災地の障害者支援

関東学院大生ら募金活動

東日本大震災で被災した「で、およそ10人が通行人に障害者を支援しよう」と、障 協力を呼び掛けた。害がある人や関東学院大 (横浜市金沢区)の学生ら 11年6月。中区の自立生 が募金活動を続けている。 活センター代表、磯部浩司 さん(43)が、センターでア



募金箱に義援金を入れる子ども。「頑張っね」などと声を掛けていく人の姿も見られた
=金沢区の京急線金沢八景駅前

ルバイトをして いた同大の 女子学生に相 談したのがき っかけだっ た。

磯部さん自身も頸髄損傷で車いす生活を送っている。「同じ障害者仲間を継続的に支援したい」と考え、女子学生が所属する同大文学部のボランティア団体のメンバーと連携。大学の構内や京急線金沢文庫駅前などで支援金を募ってきた。ボランティア団体代表の同大2年、宮武優太郎さん(22)は、今月福原県を訪れ、復興への道のりは長いということを実感した。後輩にも引き継いで支え続けていきたいと話した。

集まった支援金は支援団体の「ゆめ風基金」に送られ、被災地の施設運営などに活用される。

活動は25日も金沢文庫駅前で行う予定(午後4~7時ごろ)。

(草山 歩)

東京都 東日本大震災救援金募集・チャリティ・クリスマスカード原画展

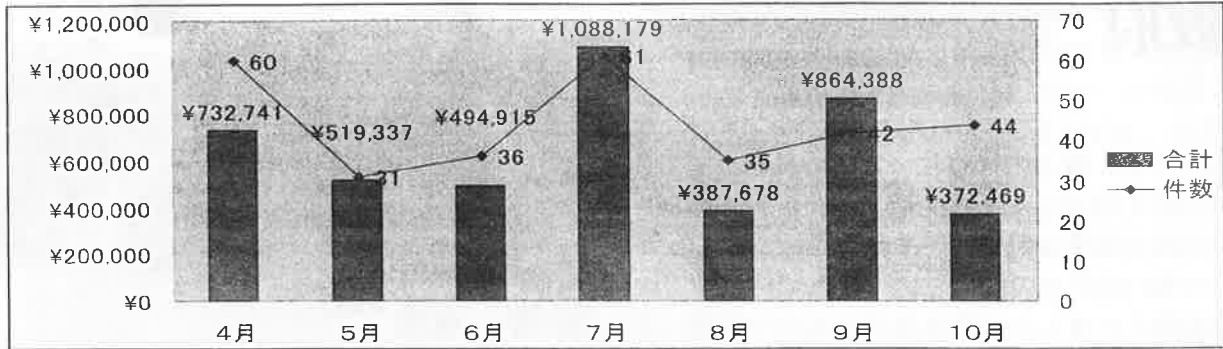
「忘れないで」と言う言葉さえ忘れちゃいそうになるのに思った程時間は掛かりませんでした。それでも、あの時日本にいたすべての人が、2011年3月11日を忘れることなんてできないということも確かなことです。

(呼びかけ文)



〇〇〇 皆様からいただいた支援金 〇〇〇

～2013年4月から2013年10月まで～



一 皆さんのコメントに、元気ももらっています。ありがとうございます。(2013/10～11月) 一
支援金の振込み用紙やメールで、コメントを寄せてください。待っています

○石川雅之氏の投書は(前号に掲載)、とても重要な大切な意見です。こういう事に復興予算を使って欲しいと思いました。(N) ○当ライトハウスは、地域で暮らす障がい者の方の憩いの場です。創作活動で作った品を地域の夏祭りで販売した売り上げ金全額を今年も送ります。(R) ○冊子をいつもありがとうございます。関心を持ち続けています。(O) ○OW大学スポ研Ⅱ AOB会の席上皆様のご意見により救援プロジェクトに些少ではありますが、寄付させていただきます。スポ研Ⅱ Aは障がい者と健常者の学生と一緒にスポーツをする授業を行なっています。(N) ○仮設での暮らしは大変なですね。交通手段がないのは、日常に必要なことが何もできない…つらいことです。皆様のご苦労が伝わります。(I) ○今年は秋を感じる期間が少ないような気がします。寒さも増してきました。皆様かせなどひかれませんように(K) ○いやな雰囲気の中の世の中になってきましたが、気落ちせずに、前に進んでいきましょう。(S)

ドキュメンタリー映画

「逃げ遅れる人々—東日本大震災と障害者—」

各地で上映会が継続して行なわれています

68回 (救援本部で掌握しているもの)

DVDの販売もまだまだ広がっています

1310本 (救援本部扱いのもの)

最近では、社会福祉協議会の研修や大学でも講義に活用するなどの動きも出てきております。大きな集会から身近な仲間で見える会などさまざまです。雑誌や新聞・テレビ等からも問い合わせが来ています。

- 「月間 社会教育」として初めて“災害”をテーマに取り組みました。今回のことで次につながるテーマや問題提起をいただきました。(I)
- 日常的に障害児の通学を見守る優しい街づくりを目指して、災害時に障害者と共に乗り越えるためにどうしたらよいか一緒に考える機会にしたいです。(Y)
- 救援活動の様子を記録したパネル・DVDの貸し出しも行なっております。こちらもご活用ください。(救援本部)

東日本大震災が過去のこととして風化されないように、情報を発信し続けることだと思います。救援本部では皆さまのご厚意に支えられ、被災地の障害者団体と連携しながら、現地での様々な支援に取り組んでいます。救援活動が本来の社会資源に移行できることを目指し、地域の方々となつながら継続していきます。

東北関東大震災障害者救援本部

<東京事務局> 全国自立生活センター協議会 (JIL) 内
〒192-0046 東京都八王子市明神町4-11-11 シルクヒルズ大塚1F
TEL: 042-631-6620 FAX: 042-660-7746 E-mail: 9enhonbu@gmail.com
ホームページ <http://shinsai-syougaisya.blogspot.com/>
◀救援活動の状況については、上記のウェブサイトにて、随時ご報告させていただいております▶



〇〇〇 引き続き 皆様さまのご支援をどうぞよろしくお願い致します 〇〇〇

このお便りをご支援をいただいた皆様に活動報告としてお届けしております。

払い込み用紙は、強制するものではありません。支援金をご協力いただける方はご利用ください。

発行所 東京都世田谷区砧6-26-21 障害者団体定期刊行物協会 定価：100円